

[ゲンロク]

2022  
JAN  
No.431  
特別  
定価 1200Yen

1

[特別付録 小冊子] **ASTON MARTIN**

# Super Battle

# 頂上対決2022

[最終進化系比較] ランボルギーニ・ウラカンSTO vs ウラカンEVO

[待望のMT対PDK] ポルシェ911カレラGTS vs 911タルガ4

[EV兄弟の個性] アウディe-tron GT vs ポルシェ・タイカン



特選ショップ全国版

## コンペティションの血統

フェラーリ812コンペティツィオーネ初試乗!  
マクラーレン720S GT3X / 765LTスパイダー



## 日本が鍛えた足もとで 世界に1台を より自分らしく

「10年、日本でアヴェンタドールは確かに成功した。供給台数のみならず、ランボルギーニの新世界としてあの手この手でカスタムされる、そのアプローチには世界が注目したものだ。」  
ランボルギーニがそのカルチャーに敬意を表したのかはともあれ、2021年初頭にたった7台の日本限定モデルとして、アヴェンタドールのジャパン・リミテッド・エディションを贈ってくれた。イタリア本社以外では世界初となる東京六本木にある常設ラウンジ「ザ・ラウンジ東京」に設置されたアド・ベルソナム専用スタジオで、コンフィグレーションして構築するという特別な仕様である。その中と同じコディネーターはないということから、まさに世界に1台の限定車となる。

そのうちの1台、マットブラックにオレンジのアクセントカラーを添えたロードスターと出会った。ユーザー氏はこの希少性を前にしても臆せずカスタムしたいと、その技とセンスに惚れたボンド大阪にすべてを委ねた。今後は固有の雰囲気を活かしながらマンソリーやノビテックを使ったカスタムをしていくという。今回はその第一弾としていち早く取り入れたホイールに注目したい。取り入れたのは国産マルチピースホイールで名を馳せるハイパーフォージドだ。10本のツインスポークからメッシュ仕上げの表情を生み出すHF-LMCである。2020年にデビューして以来、車種カテゴリー問わずあらゆるハイエンドカーに親し

# Bond OSAKA Lamborghini Aventador S Japan Limited Edition



たった7台のみのデリバリーとなるジャパン・リミテッド・エディション。「1D17」というラベルが随所にあしらわれる。この個体はボンド大阪のプロデュースにより大人っぽいカスタムをしていくという。

まれてきた。特にアヴェンタドールを含むランボルギーニ界では、HF-LMCに限らずともハイパーフォージドは、ひとつの定番品となった。デザイン自体の秀逸さもさることながら、サイズや色味などユーザーニーズに即したオーダーメイド体制であることが大きい。アヴェンタドールSやスベチアアレー勢などでランボルギーニが積極的に採用するセンターロックに、いち早く対応させたこ

とも欠かせない要因だろう。なによりもメイド・イン・ジャパン体制を貫き、ハイパーカーを許容する強度や剛性、長期的な信頼耐久性を備えていることが、あらゆるユーザーを満足させてきた。  
今回 取り入れたのはフロント9・0J×20インチ、リア13・0J×21インチ。それぞれ255/30ZR20、355/25ZR21サイズのピレリPゼロを組み合わせたというもの。

これはホイール幅も含めて純正スタンダードホイールと同じ。より太い幅のホイールでタイヤを引っ張り気味にもできるどころ、今回はジャパン・リミテッド・エディションの雰囲気に合わせて純正っぽく仕上げた。なお、HNSのアジャスタブル・ロワリングロッドによって少しだけ車高を落とし、なおかつブレーキキャ

リバーをアクセントカラーと同じオレンジに塗装することによって、より調和させていた。ホイール自体は黒基調で、ディスクはブラッシュド・アナダイズドブラック、リムはインナー、アウトターともにマット・アナダイズドブラックだ。黒く落とし込んで鍛造らしい質感を訴えかけてくるのは、いかにもハイパーフォージドらしい。ジャパン・リミテッド・エディションのコディネーターをリスベクトしながら、さりげなくハイパーフォージドを取り入れた大人っぽい仕様である。



10本のツインスポークで構成されるHF-LMC。5ホールのほかセンターロックも用意したことで、ランボルギーニ勢にも対応させた。これらセンターロックモデルの場合、センターキャップが純正エンブレムとなることから、リムにハイパーフォージドのロゴが入る。



ランボルギーニが日本に対して特別なモデルを用意してくれたからこそ、日本で生まれ育ち、この10年近くアヴェンタドールを支えてきたハイパーフォージドに足もとを委ねる。そうした意味ではこのコディネーターには説得力がある。実際、オーナー氏は過去の愛車からハイパーフォージドを履いてきて、今では全幅の信頼を置いている。アヴェンタドールは日本のスーパーカー文化に欠かせない存在となったが、ハイパーフォージドもアヴェンタドールがあったからこそ、さらなる飛躍を遂げたと思える。そんな両者は互いが手を取り合っているようであり、なにより抜群に似合っていた。